

縄文造形家・村上原野は北海道の原野に生まれ、幼少時代を父（猪風来）の縄文作品や縄文野焼きに日々身近に触れながら育つ。2010年には新見市猪風来美術館で本格的に縄文修行に入り、縄文土器・土偶の徹底的な模写を通して体得した縄文の心と技を基盤としてやがて独自の縄文の新時代の美を求めていく。その作品は大自然と大地から湧き立つ豊饒なる精気・霊気をおおらかに表象した生命のドラマを感じさせるもので、緻密で重層的に渦巻く文様表現の創造性は他の追随を許さない。近年では国内外で活動を展開し、その技量と根源力が高い評価を受け、若き縄文アーティストの旗手として期待されていた。2月16日未明、制作中の作品を99.9%完成して頭部の文様を仕上げる直前に、手に竹べらを持ったまま32歳の若さでの突然の死。その最後の作品は、大地から湧きあがる無数の渦巻く文様の中に浮かび上がる美しいヴィーナス像、両腕の途中から翅のように変容していくスパイラル文様は大地と繋がりそしてまさに未来へ羽ばたく姿。彼の魂のこもる、縄文アートの新時代を代表する名作が出来上がっていたのです。

「大地は生命の淵源であり、縄文思考の基盤である。生命が大地から湧きあがり、そのふとこで獣や草木や精霊や人として生まれ、死んでふたたび還ってゆく。大地に根ざす思考が 縄文の住居や墓や縄文土器には表されている。大地の肉である粘土、地から天へ立ちのぼるような文様、地べたの火が器に命を宿す野焼き。土器は煮炊きの道具であるに留まらず、造形によって時空を越えて祈りと宇宙観を伝える魂の器でもある。」（村上原野）



生命の大地 (2017年)
縄文野焼き作品



Sensorium(2014年)
縄文野焼き作品



生命双螺旋2 (2016年)
縄文野焼き作品



精霊のほころび (2014年)
縄文法曾陶・陶オブジェ



地より来て地に還るもの (2019年)
制作中の村上原野

【村上原野プロフィール】

縄文造形家 / 北海道浜益村出身 岡山県新見市在住 1987年生まれ
猪風来美術館を拠点に創作活動を続ける。

村上原野は北海道の原野に生まれ、幼少時代を父（猪風来）の縄文作品や縄文野焼きに日々身近に触れながら育つ。中学生の時は新潟県で火焰型土器の発掘に立ち会う機会をもち、またエクアドルの野焼きの村を訪ねる父子の旅も経験。2010年新見市猪風来美術館で本格的に縄文修行に入り、彼は縄文土器・土偶の徹底的な模写を通して体得した縄文の心と技を基盤として「現代に生きる己の感性」によるニュー縄文造形を創出する。また「土器・土偶作り」「縄文野焼き」の指導・実演など各地で普及活動も実施した。近年では多ジャンルの若手縄文アーティストらと『ARTs of JOMON』展を国内外で展開し、2015年には米国デンバー展、2017年にはマレーシア展に参加。2019年には米国ボルダー市“縄文の祭典”で北米初の縄文野焼きを実現。その技量と根源力が高い評価を受けている。2020年2月16日未明、作品制作中に逝去。享年32歳。

縄文造形家・村上原野は、私と共に親子二代にわたる悲願を遂に達成した。それは21世紀芸術シーンに縄文芸術の大輪を花開かせて、渦巻く生命と魂の輝きを放って世界の人々を魅了する新しい縄文造形美のスタイルを確立するという悲願であり、それぞれの流儀の縄文様式美の体現者として活動するという芸術の最高峰の高みを目指すものだった。代表作「生命の大地」(2017年)は、縄文土器を〈復活一体得一創造〉する芸術活動を突き抜けて現代に生きる彼の感性そのもので、大自然と大地から湧き立つ豊饒なる精気・霊気を表象した精密で重層的に渦巻く圧倒的創造性を示した。また「地より来て地に還るもの」(2019年)はエゾシカをモチーフにして生死再生をテーマに、大地に根ざす縄文造形思考の究極の表現美を示した。そして絶作となった「渦巻く翅(つばさ)のヴィーナス」(2020年)は、愛する女性をモデルに、大地から湧きあがるスパイラル文様の美しく伸びやかな表現をもって、火焰式土器や大木式土器、勝坂式土器などの古来の様式を15種以上体得した者だけが創造し得るものである。更に縄文の輪積み技法で最下部から形と文様を完成させつつ上部へと、巧みな手指技を連続して繰り出す造形技術を持つ者だけが成しうる最高に高度な技量が示されている。これらの作品は私、猪風来の作風を超えて、まさしく原野流儀の独自性をもち、古縄文を受け継ぎつつ現代に生きるものが表現し得る「新しい縄文様式美」を確立した偉大なる作品である。村上原野はまがうことなく若き天才縄文アーティストである。